

クラシック音楽との出会い、現代

医療法人エレソル たにぐちファミリークリニック 理事長
谷口 聡



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第23回は、法人後援会員で埼玉県三郷市で地域医療・在宅医療を手掛ける「医療法人エレソル たにぐちファミリークリニック」理事長の谷口 聡 様。学生時代には吹奏楽部でトランペットを担当して担任の先生の影響もあり音楽にのめり込んでいかれた思い出、そして東京フィルでの印象的なコンサートの記憶を綴ってくださいました。

私の青春時代は昭和の末で、中学時代にCDが現れ、高校時代にレコードは急速に淘汰されていった。私の家にも古いレコードプレーヤーと新しいCDプレーヤーが同居していた。学生時代は吹奏楽部に所属し、朝から晩まで浴びるように様々な音楽を聴いていた。トランペット奏者らしくワーグナー派を自称し、マーラーの「交響曲第5番」の冒頭を何度も吹き直しては、CDで聴く一流オケ奏者との格差に絶望した。そんな高校時代に強く残る記憶の話。

私のクラス担任は美術教師だったが、私はこの先生が好きでしばしば美術準備室に潜入していた(美術教師がタバコ臭いのは日本人の共通認識だが、この先生も御多分に洩れず大層タバコ臭かった)。先生はサッカー部の顧問のくせしてクラシック音楽の大ファンで、僕に様々な曲を教えて下さった。また、よくレコードも貸してくれた。バーンスタインがピアノを弾いている、マーラーの『少年の魔法の角笛』や『さすらう若人の歌』、ウィーン・フィルの『大地

レナード・バーンスタインがピアノを弾いたマーラーの歌曲集『少年の魔法の角笛』(ピアノ版)のCDジャケット(メゾ・ソプラノ:クリスタ・ルートヴィヒ、バリトン:ヴァルター・ベリー)。このジャケット写真のCDは残念ながら廃盤のようなのだが、復刻盤などで聴くことができる



の歌』を借りた時は、これらの曲に衝撃を受け、学校をサボって一日中家で、貪るようにリピート再生して聴いた。学校をサボった件について先生は口をアグアグさせていたが、一言「いいだろう? アレ」とだけおっしゃった。そしてその後続けて「いつでもいいけどちゃんと返せよ」と釘を刺された。レコードは返さざるを得なかった。

さて、最近の東京フィルで忘れられないのは、コロナ休止明け最初の定期演奏会だ。2020年6月21日のステージ、奏者が現れた瞬間、会場が感動に包まれたのは忘れられない。また、2022年2月24日にウクライナ戦争が勃発した丁度同じ時に東京フィルは定期演奏会を行っており、27日のBunkamuraオーチャードホールで聴いたショスタコーヴィチの「交響曲第1番」は素晴らしくも複雑な心境だった。指揮の井上道義氏は演奏終了後に短くスピーチされ、今、ショスタコーヴィチを演奏する意義、また、第二次世界大戦時にフルトヴェングラーが誤った思い込みにより非難された事などに触れ、この戦争により音楽と音楽家が偏見による不当な扱いを受けるべきではないと強く訴えられた事が印象的だった。

令和になり世界が急速に変化して行く中、東京フィルの紡ぐ音楽が、かけがえの無い宝として光り輝いているように私は思う。

谷口 聡(たにぐち・さとし)

1969年長野県生まれ、1998年山口大学医学部卒業。山口大学医学部附属病院、松波総合病院、三愛会総合病院など勤務、2010年たにぐちファミリークリニック院長。2015年医療法人エレソル理事長。現在クリニック、訪問診療、介護施設など運営。三郷市医師会理事、三郷市地域包括支援センター運営協議会会長。 <https://taniguchi-fc.jp/>